

# 日本の製麻事業を支えた大工場

札幌駅周辺の高層ビルが間近に見える一角。現在はサッポロテイセンボウルがある北七条東一丁目辺りに、北海道庁やサッポロビール工場と並び札幌名物の赤レンガの建物があった。北海道製麻会社（ほっかいどうせいま）の製麻工場である。

## 北海道で初めて

### 電燈がともる

北海道製麻は明治二十年に、日本で最初の亜麻を原料とする紡績（ほうしん）会社として創立。工場が操業したのは明治二十三年である。北海道の地が亜麻の栽培に適していると確信した農商務省技師吉田健作（よしたけんさく）の指導で、ヨーロッパの製麻事業に対抗して設計・建築され、一万六千平方メートルの敷地にフランス式設計の巨大な赤レンガ工場が誕生した。道内で電燈（でんとう）が初めてともされたのもこの工場。翌年には札幌電灯舎（さっぽろでんとうしゃ）の手で一般家庭でも電気の恩恵を受けられるようになった。

創成川に影をおとす壮観な姿と電燈の輝きは、異彩な光景であったろう。また、工場周辺に宿舍が造られ、多くの工員が暮らすようになり、地元商店街も繁盛（はんじょう）し大いににぎわった。花見時期になると、工員たちは思い思いの仮装をし、花火を打ち上げ円山公園へ長い行列で繰り出し、先頭が公園に着くころ、やっと最後尾が出発するといわれるほど大掛かりなものであった。

## 東区の祖・大友亀太郎

### が試作した亜麻

亜麻布（あまぬの）の歴史は古く、エジプトのピラミッドの中から亜麻布が発見さ



亜麻の試作場の様子。夏に花を咲かせる亜麻は畑一面を薄紫色に染めた。

れており、遺跡の壁面にも亜麻栽培や亜麻布作りの様子が描かれている。日本での繊維用亜麻栽培は、江戸末期に東区の地を開拓したことで有名な大友亀太郎（おおともかめたろう）が試作したのが始まりといわれる。その後、本格的に栽培されたのは明治二十二年のこと。当時の雁来村に約二十畝（※）の広さで作付けされ、政府の耕作奨励作物となつた。亜麻はこのころは契約栽培であり、大豆や小麦など、ほかの作物より収益がとても良かったため、農民はこぞって亜麻を栽培した。

一方、亜麻を紡績の原料である繊維にするための製線工場も、日本で初めて雁来村（現在の苗穂町一丁目

※ メートル法における面積の単位。1 畝=1 万平方尺

広告

